

# 一休宗純の詩観・詩風

The Characteristics of Ikkyū Sojyun's Poems

蔭木英雄

## はじめに

一休宗純(1394～1481)は次のように詠う。

①和靖の梅下の居(一)

春意年々梅一朵

高風夜々月三更

孤山曾断名利路

慚

愧詩僧吟未清

林和靖(967～1028)

の春心は、毎年梅花から生じ

香り高い風が夜毎月

下に吹く

(西湖の中の)孤山で、とっくの昔に名利を断ち切っているのに

はすかしいのは私(一休)の吟詠がまだまだ清らかでない事

だ。

たぶん、梅樹の下の林和靖の住居の絵を見て、作ったのであろう。

同じ題で『清吟腸冷横斜月』『和靖梅下居(二)』と詠するように、

林和靖は清吟の詩人であったが、一休自身は結句で、『吟未だ清

からず』と愧じているのである。

拙論の冒頭に①をあげたのは、一休宗純が自らを『詩僧』と称しているからである。彼は、『移芭蕉』でも、『詩人窓外幾風味白日晴天夜雨吟』と、詩人をもって自認しているのである。

②姪欲を以て詩文に換う

衆寮及第大雄尊

著述佳名我命根

愁夢未修雲雨約

君

恩猶喜費吟魂

衆寮で開悟して、わしは釈尊と同じになったものの

詩文を作る名声

こそ我が命なのじゃ

愁いの夢の中で、情を交す約束をまだ果さぬが

そなたの愛情が喜ばしい。なぜなら恩愛によって一そう詩情をそそるか

らだ――

と、一休は文学僧の名声を求め、今日に『狂雲集』『自戒集』な

どを残しているのである。

狂雲子、また夢聞と号する一休宗純は、応仁・文明の乱世に、師兄の養叟宗頤及びその門派の人々を痛罵する偈を作り、愛欲の情を赤裸々に二十八字に吟じた。『狂雲集』は同時代の詩文集の中で、際立って異彩を放っている。

一休はいったい如何なる詩観を抱いて、かかる異色の詩風を作り上げたのか。中本環氏の「一休宗純の詩観について」(『中世文藝』46)とは視点を變えて論じてみたい。一人の人物の詩観を究明するとは、

- ① 彼が詩をどう考えていたか。換言すれば、人間生活(一休の場合、禅僧の日々)に於て、詩をどう位置づけているか。
- ② 如何なる詩を良いと考えているか。秀れた詩の条件は——?
- ③ 秀吟を作る為にはどうすればよいと考えているか。門弟に詩の学び方、作り方をどう教えているか。
- ④ 古今東西の詩人や作品をどう評価しているか。などを考察する事であろう。

中世の詩僧が自己の詩観を表明する場合は、日記をはじめとして、道号の由来を述べる「字説」、詩文集や詩軸の「序跋」、山門疏や江湖疏などの「四六疏」、弟子に与える「法語」、そして書簡文などである。例えば、虎関師鍊の「済北詩話」、中巖圓月の「藤陰瑣細集」、義堂周信の「空華日用工夫略集」、横川景三の「小補東遊集序」などである。ところが、一休宗純には直接に詩文観を披

瀝した文章は無く、結局、『狂雲集』『続狂雲集』(以下、両書を一括して『狂雲集』と記述)から、帰納的に考察するより方法はない。

ところが、『狂雲集』は必ずしも製作順に作品を排列しておらず、製作年月の不明のものが大部分である。従って、当然に時代的に変化する詩観を通観し得ず、時には矛盾的詩観に逢着する事がある。しかも、一休の詩偈には逆説的表現が多く、作品から帰納的に彼の詩文観を探る事は容易ではない。これらの困難点を承知の上で、以下、詩僧一休の詩観・詩風を考察し、加えて、従来の『狂雲集』解釈の憚らなさを補ってみたいのである。<sup>(3)</sup>

## 一

かつて、萩原朔太郎は次のように述べた。

すべて此等の「現在してゐるもの」は、その現実感の故に散文的である。故に詩的精神の本質は、第一に先づ「非所有へ<sup>プロゼック</sup>のあこがれ」であり、或る主観上の意欲が掲げる、夢の探求であることが解るだろう。<sup>(4)</sup>

この説を首肯するなら、私達に「非所有へ<sup>プロゼック</sup>のあこがれ」が有る限り、人間と詩とは切り離せぬ。ところが、詩聖杜甫は、「文章は一小伎 道に於ては尊しと為さず」(「胎華陽柳小府」)と、詩文は必ずしも尊いものと思わなかった。効用主義・載道派の杜甫としては、当然の文学観であった。一休宗純はこのような杜甫を、人は絶代聖人の徒と言えど 誰か清高老杜の途を踏まん

乾坤風月は詩囊の底 堯舜の君恩は吟裏の鬚△杜甫像」(一)

一身は濁世 意は清天<sup>6</sup> 羈客の生涯三十年 夔州の夜雨秋

風の暮 筆に信せし好詩千万篇△杜甫像」(二)

など、賛歌を吟いあげた。載道派の杜甫は堯舜の道を、萩原朔太郎の言う「非所有のあこがれ」として、千万篇の名品を制作した。しかし、濁世に生きる一休宗純は、教外別伝の正法眼を求め、不立文字を標榜する禅僧である。彼は詩を単に、「非所有(悟り)へのあこがれ」として、又は、「己事究明」「見性成仏」の心境の表明として、詩の存在を素直に肯定できなかった。

### ③文章を嘲ける

人具畜生牛馬愚<sup>7</sup> 詩文地獄工夫 我慢邪慢情識苦<sup>8</sup> 可

嘆波旬親得途

(牛は牛、馬は馬のままで至道無難なのだが)人間というものは(それに気付かず)畜生の牛馬の愚かさを持つておる 詩文はもともと地獄行きの工夫なのじゃ 我慢や邪慢の心で(詩を作って)情欲や分別的知識に苦しんで 悪魔につけこまれるとは嘆かわしい事じゃ

一休にとり詩作は地獄入りの片道切符であり、本来否定さるべきものであった。結句は、『碧巖録』九十七の、「伎倆既に無ければ、波旬途を失なう」(清い透明な心を持っていて、情欲や知識の働きをとめると、悪魔も誘惑のしようがない)の裏がえしなのである。しかも一休は、「狂雲は大徳下の波旬」△「前年辱賜云々」と、自分を大徳寺

門下の悪魔であると自認している。従って③の結句は、一休自身詩作にはかならず、その自己を嘲りつつ苦しんでいる——と解釈出来るよう。

中国の詩論書『詩品』の冒頭は、人の感性は外物からの刺激に反応して、そこから詩が生じること述べる<sup>9</sup>。室町時代の気が物情を動かし、室町禅林の紊れた景物が一休の歴史的心情を揺り蕩かして、一見、抜舌罪や不邪淫戒を犯すような罵詈の偈や、耽色の詩が生まれたのであった。西脇順三郎が、

詩人は詩作することによって、自分の脳髓の心理的調整をはかろうとする。あるいはまた心理的体操をやって脳髓の健康と安定を保とうとする<sup>10</sup>。

と述べているのは、詩人一休の心情に部分的にあてはまる。

### ④念起所を警む

公案工夫暮与朝 山堂夜々雨蕭々 地獄猛火百万劫 満  
腹詩情幾日消

明けても暮れても公案の工夫 山堂には毎晩雨が寂しくシトシトと降る (だのに) 地獄の猛火はいつ迄も燃え 腹一杯の詩情は(猛火と同じで) いつ消えることやら——

起承句から私は、『碧巖録』四十六の「鏡清雨滴声」の公案を想起する。それは——鏡清道愔が雲水に、「門外は什麼の音じゃ」と問うと、「雨だれの音です」と答えたので、「衆生顛倒して、己

に迷うて物を逐う（みな自己を忘れて客観の世界に執らわれている）」と  
 教戒した——という公案である。一休は雨の音を聞きつつ、この  
 ような公案を工夫していたのであろう。しかるに、詩情の猛火は  
 雨にも消えずに燃えさかるのである。

## (二)

### ⑤ 破戒

悪詩題取記吾曾

儒雅風流破戒僧

吟断十年樵屋底

山

林暗夜对残灯

下手な詩を作って自分の昔を記してみると

儒者にとつての風雅は僧

のワシには破戒であった

ゆえにこの十年間、詩作をやめて木こり小

屋で暮し

山林の暗夜に残灯に向って坐っているのじゃ

一休は風流を仏者の立場から否定し、破戒ときめつける。結句の  
 山林は、『山林は富貴五山は衰う』『題養叟大用庵』から考えると、  
 五山官寺に対する語で、大徳寺をさしており、残灯も、大徳寺開  
 山大灯・国師宗峰妙超の禅が衰微していることを示している。よっ  
 て結句は、（大徳寺門派の衰えている今、衲は細々と大灯禅を守  
 るのじゃ）という読みが成り立つ。

### ⑥ 破戒

扶桑艶簡散文鮮

吟杖清高雲月天

流落江湖風雨枕

詩

情自折十余年

日本の恋文や散文は美しく 杖をついての吟詩は雲や月の空のように  
 清く気高い（しかしそれは過去のワシの破戒行為じゃった） 今は田  
 舎で落ちぶれて風雨の音を枕辺に聞き 自分で詩情を十年余りも折つ  
 ておるのじゃ

『風雨雪月艶簡を吟ず』『日課』という如く、一休は艶簡を日課  
 とし、『艶簡艶詩三十年』『末後涅槃堂懺悔』と、三十年間も作  
 り続けた。それが⑥の破戒なのであろう。江湖に流落する今は、  
 その反省？から詩作の筆を折ったのであった。ところで承句の流  
 落は、『自然に流落し塵縁を絶つ』『題白樂天像』のようなものな  
 ら、反省？の成果もあつたろう。しかし、『流落すれども終に塵  
 外の友無し』『客中』『江山に流落して識情を長ず』『好名懺悔』  
 という、俗塵・名譽欲にまみれた流落でもあった。

私は、『一休は風流を破戒と認め、艶簡艶詩を作り続けた三十  
 年を反省？した』と、反省の二字の下に？を付けた。それは、次  
 のような作品があるからである。

### ⑦ 懷古

愛念愛思苦胸次

詩文忘却無一字

唯有悟道無道心

今

日猶愁沈生死

拙僧はむかし愛欲に溺れて心を苦しめ

詩文も忘れきって一字も作ら

なかった

ただ悟りたいばかりで求道心が無かったが

今でも生死

の輪廻に沈んでいるのが悲しい

⑧ 懷古<sup>二</sup>

十年溺愛失文章

不是行天然即忘

翰墨再論近年事

輪

廻断尽隔生腸

十年間愛欲に溺れて文章を失っていたが

これはわざとでなく自然に

忘れていたのじゃ

詩文を再び論じはじめたのはつい近年の事で

(愛欲と詩文との) 輪廻を切断するのが来世の願いのじゃ

愛欲の為に自然に詩文を忘れていた十年(⑦⑧)と、破戒僧の自覚から意志的に詩情を折っていた十年(⑤⑥)とは、別々の十年だろうか。もし重なり合うとしたら、一休は、千々に乱れて矛盾分裂する詩観を抱いて、江湖を行脚した事になる。私はそういう矛盾する一休の内面を想って、⑧の結句の輪廻をカッコのように訳したのである。やはり前述した如く、制作年月が不明の作品から、彼の詩観を統一的に把握しようとするのが、まちがいのかも知れぬ。

⑨ 頌

忘却万端詩未忘

半生半死涅槃堂

黄泉路上此吟興

閻

老宮前後悔腸

総てを忘れ果てても詩はまだ頭から離れぬ

息も絶えだえの病室でも

—— 死出の旅路でも此のように詩興がわく

エンマ様の御殿で

後悔することじやろう

圓悟克勤を一休は、『涅槃堂裡に言詮を絶す(禪寺の病室で圓悟は言語詩文を超絶して悟った)』(『圓悟大病』)と詠じたが、彼自身は涅槃堂

でも、宿業の如く詩が忘れられなかった。習気に染まりきっていたのである。ペタルを踏みやめると倒れてしまう自転車と同様、研究と教育をやめると自己の存在感を喪失する自分の姿を、一休の詩偈の中に見出す私である。畢竟、文学は人間省察である。

⑩ 偈を作り、飯を博て喫す

来往東山昔如今

飢時一飯価千金

荔支素老仏魔話

慚

愧詩情風月吟

東山建仁寺に昔も今も往来し

空腹時の一碗の飯は千金の価値がある

荔支をたたえた清素は仏魔の話をしたが

ワシは飯をたべ詩情を抱

いて風月を吟するのがはすかしい

一休は周建と称した少年時代、東山建仁寺の慕結龍攀につき『三休詩』を学んだ。⑩の起承句は題の通り、偈を作って食費を得た事を詠う。売文である。私は本稿の主題から結句に傍線を引いたが、⑩の眼目は実は転句にある。兜率從悦(1044-1091)は清素首座に荔支を献じたあと、自分の修行経過や見解を述べた。すると清素は、

只だ仏に入るべきも、魔に入るべからず。須らく知るべし、古徳の、「最後の一句始めて牢関に到る」と謂いしことを。

と述べ、兜率を導いた。——この禪宗史話を踏まえて転結句を解

積しなおすと、

(故郷の菓物の) 荔枝を食った、清素首座は、(荔枝をくれた兜率に) 仏魔の公案を与えて接化教導した。ところが、作偈の代償に飯を食ったワシは修行者を指導することなく、風月を吟じているのが愧かしいわい。

となり、二十八字には表われない傍点の一休の心情が、教職にある筆者に々と迫ってくる。

### (三)

#### Ⅱ末後涅槃堂の懺悔

艶簡艶詩三十年 虚名天沢正伝禅 吟身半夜与灯瘦 雪

月風流白髪前

恋文や艶詩を三十年も作り続けたワシは 虚堂(天沢庵主) 正伝の禅

者といっても、それは虚しい名声じゃ 艶詩を苦吟する身体は灯火が

薄れるのと一しよに瘦せ 雪じゃ月じゃと風流にうつつをぬかしてい

る間に白髪になってしまったわい

転句の灯は、言う迄もなく大燈、国師の禅の暗喩で、艶詩に耽れば耽るほど大燈は衰えてゆく——と嘆く一休であった。彼は、

詩を論ずるは禅を論ずるが如し。(中略) 大抵禅道は惟だ妙悟に在り。詩道も亦妙悟に在り。

と嚴羽が述べるような、安易な詩禅一致論は有しなかった。

#### Ⅱ自贊

大燈佛法没光輝 龍宝山中今有誰 東海児孫千歳後 吟  
魂猶苦許渾詩

大燈国師の禅は輝きを失ない 龍宝山大徳寺には今(大燈禅を継ぐ者として) 誰が居る? (虚堂禅師が詠った日多の偈の)<sup>(13)</sup> 東海の子孫のワシは千年の後まで 詩情を抱いて許渾の詩に苦しんでいるのじゃ

一休宗純は、『嘆息す多年大燈を晦ませしを』、『前年辱賜大燈国師頂相云々』と自悔する反面、『狂雲は真に是れ大燈の孫』、『山居』、『一人荷担す松源の禅』、『自贊』と、松源崇岳から大燈国師に伝わる禅を継承している事を自負する。Ⅱで艶詩によって大燈禅を衰微させた懺悔する一休は、Ⅱでは、大燈の輝きが失せた大徳寺で、許渾の詩叢に苦しむのであった。

Ⅲ渴しては水を夢み、寒うしては裘を夢む。閨房を夢みるは乃ち余の性なり。(中略) 余則ち老狂薄幸にして、吾が好む所を標すのみ。因て四篇を題し、以て夢閨記を為りて云う、

巫山雨滴入新吟 姪色風流詩亦姪 江海乾坤杜陵淚 鄭  
州今夜月沈々

巫山の雨だれの音が我が新作の詩に入りこみ ワシは色欲に姪れ風流にのめりこみ詩にも自己を失なう 広い江海の天地をさすらう杜甫は涙を流して 鄭州(の妻の閨房)を眺めると今夜も月が沈んでゆく

起句は興趣深い。巫山は宋玉の「高唐賦」に詠われる如く、男女の情事を表わし、『狂雲集』にも頻出する。雨滴は④で述べた、雨だれの音を聞く自己をば失なうな」という「鏡清雨滴声」の公案に拠る語である。従って起句は、

ワシは今度の新作でも、己事を究明せずに、情事に淫れた詩を吟じてしまった

という意味になる。一休は現実的非所有の閨房をあこがれ夢に見て、色欲・風流・艶詩に姪するのであった。

#### (四)

艶詩といえは、一休はしばしば祖師の圓悟克勤の故事を詠う。

#### ⑭圓悟大師の投機

沈吟小艶一章詩 発動乾坤投大機 擊竹見桃若相問 須

弥脚下石烏龜

(圓悟禪師は) 小艶詩を静かに吟じて 天地を動かし仏祖の機に合

致して大悟した 香厳和尚の擊竹や靈雲禪師の見桃(の大悟の契機)

をもし問う者がいたら ワシは二人とも須弥壇下の黒龜のような大

馬鹿者じゃ」と答えようぞ。(小艶詩はすばらしい)

一休の師の華叟宗曇は諡号を大機弘宗禪師というので、承句は⑩起句と同様、一種の懸詞である(禅文学では機縁の語という)。従つ

て起承句は、

わし(一休)も小艶詩を吟じて、天地を撼がして華叟老師に参禅した。

と解釈する事が可能である。香厳智閑と靈雲志勤とが、石烏龜の如くに不動であったのに対し、圓悟と一休とは、小艶詩を吟じて天地を震撼させたのだった。

#### ⑮圓悟の大病

巫山夜々夢難驚 艶簡題詩対鉄槩 只為檀郎呼小玉 風

流可愛美人情

夜ことの巫山の(神女と契った)夢は覚めがたく 恋文に詩を書きつ

けて鉄の燭台に向う それはただ愛する男性に(自分の存在を知らせ

ようと、侍女の)小玉を呼ぶようなもので 風流な美人の心情は愛す

べきである。

小艶詩に依拠する転句は、己事究明・見性成仏を自証させる為に、手段として文字言語を援用するという喩えである。それは月と指の関係である。月(真理・仏性・美人)を相手(修行者・檀郎)に見つけさせる為には、指(文字言語・小玉を呼ぶ声)が必要である。故に結句の「美人の情」とは、檀郎つまり修行者に、自己の内なる仏性を自証させる慈悲心なのである。このように考えると、艶詩を吟ずる事は、一休宗純にとっては、下化衆生の大乗仏教精神である。のだった。

⑩ 圓悟の大病<sup>二</sup>

娘生仏果已円成 大病苦中無識情 小艶詩情人不会 鶏  
声茅店月三更

圓悟仏果禪師が生れつき持つてゐる無上正等覚（仏果）はすでに成就し  
金山で大病に苦しんでも、知識情念に執らわれなかった 小艶詩  
の心を人々は会得しなかったが 圓悟禪師は鶏の声を聞いて大悟し、  
その時、夜中の月が宿屋を照らしていた

起句の仏果は、圓悟克勤の禪師号と無上正等覚の意を懸けている。  
転句で、“小艶の詩情 人は会せず”と吟ずるのは、裏がえすと、  
“圓悟禪師は小艶詩の心をきちんと会得し、衲も理会して艶詩を  
吟じ続けるのだ”という宣言と受け取れるのである。なお、結句  
は、『三体詩』温庭筠「商店早行」の、“鶏声茅店月”の名句と、  
注(17)の圓悟大悟の鶏鳴とに拠っており、心憎いほど巧妙な作句  
である。

艶詩を吟ずる事は下化衆生の大乗行というものの、一休の心  
は時としてゆらぐのであった。

⑪ 病中

美膳誰具一双魚<sup>(18)</sup> 小艶工夫日用虚 姪色吟身頭上雪 目  
前荒草未曾鋤

食膳に誰がうまい二匹の魚を添えてくれるのだ（誰からも手紙が来ない）

だから小艶詩を作る日用の工夫（下化衆生の大乗行）も空しい  
色欲に耽り詩を吟じて頭も白髪となり 目前の煩惱を除くこともせ  
ぬ。煩惱即菩提じゃ。

結句は、「三乗十二分教という釈尊一代の教えは、仏性を説き明  
したものではありませんのか」という質問に対する臨済義玄の、  
荒草曾て鋤かず（衲は胸中の荒草を一度も刈った事はない。無明の実  
性が即ち仏性なのじゃ）。  
という返答に拠っている。姪色の小艶詩の虚しい工夫が、即ちそ  
のまま仏性である——とは言うものの、承句を吟ずる一休の心中  
には、微かな後めたさが有ったのではなからうか。

⑫ 圓悟大師の投機頌<sup>(19)</sup>の後に題す

新題小艶一章詩 詩句工夫説向誰 残生白髪猶淫色 鬼  
眼閻魔決是非

（圓悟大師投機頌を読んでワシも）あらためて小艶詩を作ったが 詩  
句の工夫は誰に説明しようか（誰も解ってくれぬ） 残り少ない白髪  
の人生なのにまだワシは色欲に耽っておるんじや 人物を見ぬ閻魔  
が結局ワシの是非を決めるだろうよ

傍点の三語が⑩と重なる。意味の上では、“説向誰”は⑩の“虚”  
に、“猶”が⑩の結句に、“白髪”が⑩の“頭上雪”に対応してい  
て、⑫は全く同じテーマを詠っているのである。鬼眼は諸橋『大  
漢和辞典』を引くと、（相士の眼）とある。閻魔は死人の吉凶良



否を見ぬく眼玉を持っているのである。当時の似而非禅匠や現今の文筆家たちは、

一休は艶詩を作り、姪坊に出入するエロ坊主である。と皮相的に評しているが、

結局は、閻魔がワシの本質、つまり、艶詩は下化衆生の慈悲行である事を、見抜いてくれるわい。

というのが④の結句なのである。これをも、「一休の自己弁護なり」と解する凡俗は、まさに、

鉄棒応に惶るべし 鬼眼睛△嘲文章△(一)

と、閻魔に小ざかしい知恵を見すかされて、鉄棒で打ちすえられるに違いない。

一休純の下化衆生の慈悲行は、罵詈の詩偈となって表われる。ここにも、彼の詩観①(拙論冒頭の「人間生活に於ける詩」の位置づけ)を見る事が出来る。

⑨抜舌罪を懺悔す

言鋒殺戮幾多人 述偈題詩筆罵人 八裂七花舌頭罪 黄

泉難免火車人

ワシは剣のような言葉でどれ程多くの人を殺してきた事か 偈や詩を作っては、筆で人を罵倒する(しかし、これは雲門や黄檗のように慈悲行なのじゃ) 他人を惑わす舌先三寸の罪は 死出の旅路で火車に乗せられることだろう

中本環氏によれば、『狂雲集』は偈頌賛を中心に集め、『統狂雲詩集』は詩を中心に集めているという。<sup>(20)</sup>すると傍線の承句は、『狂雲集』の偈、『統狂雲詩集』の詩の何れを問わず、養叟・春浦をはじめ人々を罵倒し続けている事になる。一休の罵詈雑言は単なる怒声や怨恨の叫びではない。『碧巖録』六に、

平鋪の処に到って又却て人を罵る(雲門文偈は日常会話でも人を罵って導く)。

とあり、又、『碧巖録』十一には、

人多く喚んで、「黄檗人を罵る」と為す。具眼の者は自ら他の落処を見ん(多くの人は「黄檗希運は、よく人を罵るお方だ」と言うが、具眼の者は黄檗の真意を知っているだろう)。

の用例で明らかな如く、罵詈の詩偈は胡亂の修行者を覚醒させ、警策する接化の手段なのであった。

⑩末後涅槃堂の懺悔<sup>(二)</sup>

風音氣象頌兼詩 乘輿邪慢吟撚髭 惡魔内外託吾筆 猛

火獄中無出期

風の音や天気によって頌や詩を作り 輿に惡のりして髭をひねって詩を吟ずる 惡魔は内からも外からもワシの筆に乗り移って 猛火の地獄から脱出する時がないわい 一休の罵倒の筆鋒は、惡魔が乗り移ったの事であった。その惡魔とは、

悪魔臨。正伝境。〔圓悟大病三〕  
悪魔鬼。眼晴。〔賛臨。済和尚〕

の用例が示すように、臨済禪の正伝を見抜く眼光の持ち主なのである。

このように帰納的に『狂雲集』を読んできると、一休の姪らな艶詩も、激しい悪罵詩も、すべて臨済禪、真実の仏法を希う叫びなのである。かつて萩原朔太郎が、

道德的情操は、本質に於ての詩的精神である故に、すべて倫理感を基調としてゐる文芸は、必然的に「詩」の觀念に取り入れられる。しかしながら、より真の詩を持つものは、道德でなくして宗教である。なぜなら宗教は、一層「感情の意味」が濃厚であり、イデヤに於ての夢が深く、永遠に実在するものに対するプラトンの思慕の哲学を持っているから。<sup>(21)</sup>（傍線は筆者）と述べたのが想起され、首肯されるのである。

## (五)

一休宗純は、屈原・司馬相如・王維・李白・杜甫・白居易・寒山・林逋・王安石・蘇軾・黃庭堅など多くの中国詩人を詠っている。本稿では杜牧をとりあげ、一休の詩風の特徴を探ってみたい。五山文学の双壁と称せられる義堂周信・絶海中津も杜牧を詠じているが、そう多くはない。時代が下って月舟寿桂（1460～1533）は、

その著『三体詩幻雲抄』の中で、  
是杜牧平生愛女色之謂也。

例ノ杜牧力好イタル事也。

村（村庵即ち希世靈彦）云ク、杜牧力淫乱ニ依テ、二番ヲ云モ面白也。

と、杜牧をば好色の詩人と理解している。さらには、

杜牧ハ僧ヲ惡也。（されど）山中ニテ僧ニ知吾カト問ヘバ不知ト云処ニテ、僧ハ殊勝ナル者トテ信向（信仰）スル也。

と記して、杜牧を仏教信者と観ている。そういう五山文学僧の、杜牧理解の延長線上で、一休宗純は次のように詠う。

### ㉒ 杜牧

宗門活句阿房宮 六国興亡六国風 筆海詞林何所似 晴

天万里月方中

杜牧の「阿房宮賦」は臨済禪を生きいきと表す活句であり（杜牧も

賦す如く）六国の興亡は（秦が原因でなくて）六国自身の国風によつた

のだ（故に己事を究明し、脚下を照顧せよ）杜牧の筆する詩句は何

を似しているのか—— 広大な青空のマン中に月が輝いている

杜牧は「阿房宮賦」で、

嗚呼、六国を滅ぼす者は六国なり。秦に非ざるなり。

と賦う。これは禪者にとり活句である。『碧巖録』二十に、「須らく活句に参ずべし、死句に参ずる莫れ」と教えている。また『碧

巖録』三十九に、「水中に元月無し。月は青天に在り」と述べているが、一休は結句で、杜牧の筆する詞句は、その青天の月（＝真如）を似している。と吟破するのであった。

〔22〕贅杜牧

楊州雲雨十年情 情浄無求儒雅名 禪榻消愁髻糸雪 落

花風与一身輕

楊州で（巫山の）雲雨のように男女の情を交した十年 杜牧の詩情は浄らかで儒雅の名声を求めなかった 禪院の椅子で（茶を飲めば）愁は消えて、白髪頭に 落花の風が吹いて身も輕い

起句は杜牧の「十年一覺楊州夢」△遣懷△、転結句は、やはり杜牧の「今日髻糸禪榻畔 茶烟輕颺落花風」△醉後題僧院△に拠っているのだが、『三体詩幻雲抄』は「醉後題僧院」について、アラ無興や、頭ハシラガニナリテ御僧寺ノ辺テ座ニ妓女モナク、酒モ不飲シテ已上落花風ニ茶ヲ啜タマデ也。

と解説して、杜牧を放蕩兒と観ている。一休も同じ視点でうたう。

〔23〕贅杜牧

才調風流更絶倫 杜書記業偽中真 詩情儒雅姪於色 不

説蒼生説美人

杜牧の才能や風流は比べる者が無く 杜書記の功業は偽中に真を詠つ

た事じゃ 詩情は儒者の風雅じゃったが色欲に姪れて 民草を説かず美人ばかりを説いておった

起句と結句は、『三体詩』李商隠「賈生」の、

宣室求賢放逐臣 賈生才調更無倫 可憐夜半虛前席 不問蒼生問鬼神

に依っている。一休と『三体詩』の違いは、起句の風流と結句の美人であろう。彼は「寄南江山居」でも、「平生杜牧風流士」と、杜牧を風流士と呼んでいる。

一休宗純の風流というのは、『大漢和辞典』に記す①美風のなごり、②礼法に拘らず衆に異なること、③風雅、④寵榮に浴すること等の意味だけではない。

風流自ら愛す寒儒の意△雪△

寒儒の忠義 也風流△看杜詩△

儒雅の風流 豈に邪有らんや△詩△

淵明の吟興 我が風流△南園殘菊△

は、陶淵明や杜甫の如き詩人の③風雅である。しかし、

円成公案 風流を愛す△円相△

風流愛すべし 公案円なり△善惡未嘗混云々△

見処の風流 悟道の心△見桃花図△

というように、⑤悟りの境を暗示する。そして、〔11〕〔13〕や、

少年の風流事を失却す△羅漢遊姪坊図△

姪坊の年少也風流△不邪姪戒△

の句は、釈尊の弟子の阿難少年が、姪坊で大智を<sup>つゝ</sup>発いた仏教故事に基づいており、風流は⑥艶情の中に禅旨を含む語として用いられている。又、逆に⑤に見られる如く、世俗的常識的な意味で、⑦破戒的な意味も含んでいる。もちろん、禅者独特の逆説的破戒でもある。

一休の「美人」の語についても、風流と同じ事が言えるのである。

風流は美人を寵する盟に在り「題画」

風流愛すべし 美人の粧「閑工夫」

風流愛すべし 美人の情「圓悟大病」

美人の勝熱 抱持の談「童子南詢」

というように、艶情と禅心を内包した用例が見られ、それを個体的に存在化しているのが、

一代風流の美人「看森美人午睡」

森侍者であり、そして杜牧だったのである。

蛇足ながら③の承句について、一言説明しておきたい。「碧巖録」七十八に、

長く両脚を<sup>の</sup>舒べて睡れば、偽も無く真も無し。

と、自由超俗の悟境を述べているが、一休は、

杜牧は偽（姪於色）の中に真（風流）を詠うという功業を、後世に遺したのである。

と称えているのである。一休自身の偽悪的趣向も、これと軌を一

にするものであった。

## 六

残り少なくなった紙数だが、「<sup>ら</sup>藟苴」をキーワードとして、一休の詩風の特徴を瞥見しておきたい。彼は、

杜牧は藟苴 是れ我が徒「吸美人姪水」

と、藟苴に於て、杜牧と同類意識を抱いている。柳田聖山氏は、無頼の徒、ガサガサしていること、善意でいうのが普通。男性的魅力あること。

と述<sup>24</sup>べ。平野宗浄氏は『大漢和辞典』の、「泥がごつごつしているさま」を記<sup>25</sup>し、その上に、

藟苴名とは佳名と対照的で、あまりかんばしくない名をいう。

あらあらしいという形容。

と述べておられる。<sup>26</sup>一休宗純は文明六年（1474）二月の「龍宝山大徳禅寺入寺法語」で、

新長老 乾坤一箇の藟苴「僧宝」

と述べ、

平生藟苴小艶吟 酒姪色姪詩亦姪「退院」

と放吟して退院した。彼はまさに藟苴僧であった。

一休は自分を虚堂智愚の再来と自認し、<sup>14</sup><sup>15</sup><sup>16</sup><sup>18</sup>などで圓悟克勤をよく吟ずるのであるが、『虚堂和尚語録』巻六「圓悟勤禅師」

に、

藟苴翁 別に長処有り

という句がある。つまり、藟苴とは蜀出身の圓悟克勤のアダ名なのである。藟苴は、『三体詩』最多収載の杜牧と、小艶詩で開悟した圓悟禪師と、そして一休の三者を結びつける語なのだった。

②念起所を嫌わず

平生贏得藟苴名 信口言詮群衆驚 自讃毀他長情識 乾

坤江海我詩情

ふだん拙僧（一休は）藟苴の名を頂戴しており ロマかせの言葉（艶詩や罵詈雑言）に人々は驚いている 自分をはめ他人をそしって情欲と小知を増長して 広い天地江海がそのままワシの詩情なのじゃ

題は⑦の逆であり、起句は杜牧「遣懷」の「贏得青樓薄倖名」（私は妓楼で放蕩児の名を頂戴した）に拠っている。やはり杜牧を念頭に置いて吟じているのであり、藟苴名は青樓薄倖名に重なるのである。一休は、ある時は、「狂雲は真に是れ大灯の孫」「山居」と自讃し、ある時には、「梅檀の仏寺利名の禪 公案腰に纏う十万銭」「賀熙長老云々」と毀他したが、自讃毀他の激しさも、藟苴の名に価するものであった。

③自賛

八十窮僧大藟苴 姪坊與半尚勇巴 半醒半酔花前酒 臨

濟徳山何作家

八十歳の老いぼれのワシはとんでもない無頼漢で 色街の遊興を中途にしてまた男色に溺れるしまつ ほろ酔い機嫌で花見酒を呑めば（杜牧「金昔遊」半醒半酔遊三日に拠る） 棒喝の臨濟徳山などどうして大師家であるもんか（ワシの眼中にないわい）

一休は、「破戒の沙門八十年（病中）」とか、白髪が残僧八十年（季秋猷裘云々）というように、八十年の生涯を破戒の殘僧と省み、大藟苴とふりかえる。その藟苴は、承句の色欲に繋がるものであった。そして、「臨濟義玄の喝や徳山宣鑑の棒など糞くらえ」と大見得をきるのである。そういえば、起句の窮僧は窮措大（まことの道人）を基底に置いているように思える。

制限紙教に達した。尻切れトンボの如き論文となったが、一休文学の特色を示す偈をもう一首読んで、結びに代える。

④藟苴を慚愧す

山舎多年隣茂陵 生涯雲雨一閑僧 紙窓夜坐鉄檠下 一

点寒灯照寂寥

ワシの山小屋は長年茂陵の隣にあり 一生、雲や雨を眺めて暮す（男女の交情を夢みる）閑居の坊主である 紙窓のそば、鉄の燭台の下で坐っていると 寒々とした灯がさびしい衾を照らし出す

「臨濟・徳山など糞くらえ」と色情に溺れる大藟苴は一休の虚像なのか、藟苴を愧じて大灯禪を細々と護持する一休が実像なのか

——。いったい一休像をどうデッサンすればよいのか。太平・爛熟・飽食・輕小の平成時代の凡知では、一休文学は到底はかり知れない。見得したと思えば、するりと視野から遠ざかる。それが『狂雲集』の特色であり、又魅力でもあらう。一炷香も坐らぬ者が、一面的に論評する事だけは自戒しなければならない。

注

- (1) 一休宗純にとり佳名とは、「絶代佳名君兔毫」「山谷像」「可憐悟道発佳名」「香巖擊竹」というように、詩や悟道の名声であり「純老佳名発海東」「自賛」というように自負している。
- (2) 中本論文の末尾だけ紹介しておく。「一休はある場合には詩や詩情を否定し、ある場合にはこれを肯定するが、「名利」「塵縁」を断ち、「識情」無く「清く」「高い」ところ、詩や詩情も何らさしきわりなく是認する、ということになろうかと思われる。」
- (3) 近刊予定の拙著『乱世の一休——狂雲集精読抄——』では、百三十首の精解と味読を試みた。
- (4) 萩原朔太郎『詩の原理』（新潮文庫七三頁）
- (5) (6) 一休は清らかな詩を尊ぶ。故に①で吟末清と愧しる。
- (7) 『碧巖録』五十八に「一日雪竇に問う、「至道無難、唯嫌揀扱。意作麼生」宗云く「畜生、畜生」とある。
- (8) 七慢の一。一休は「乘興邪慢吟燃髭」と自認する。
- (9) 氣之動物、物之感人。故揺蕩性情、形諸舞詠。（中略）動天地、感鬼神、莫近于詩。（『詩品』序）

- (10) 西脇順三郎『わが詩学序説』
- (11) 『羅湖野録』下にある。なお一休には「仏魔公案的伝無」「賛兜率禪師」の句もある。
- (12) 『滄浪詩話』詩弁。嚴羽の「論詩如論禪」は多くの評者により批判されている事は、船津富彦『中国詩話の研究』八〇頁以下を参照。
- (13) 大応国師南浦紹明が咸淳三年（一二六七）秋、帰朝する時、虚堂智愚が贈った偈のこと。結句に「東海児孫日転多」とあるに拠る。
- (14) 一休宗純が少年時代から親しんだ『三体詩』には、杜牧の二十首の次に多く収載されているのが許渾の十七首であり、一休は「分明画出許渾図」「自賛」と、自分の頂相（肖像画）に許渾の姿を重ね合せている。
- (15) 『五灯会元』十九の圓悟克勤の項にある禪宗史話。圓悟は金山で罹った大病が治って、師の五祖法演のものに帰ると、五祖は陳提刑に小艶詩を提唱していた。それを耳にして圓悟は大悟した。
- (16) 五祖法演が陳提刑に提唱した小艶詩に拠っている。即ち、「頻呼小玉元無事 只要檀郎認得声」。この禪話は一休がよく読んだ『大慧武庫』にもある。
- (17) 『五灯会元』十九に拠ると、圓悟は五祖法演の小艶詩提唱を聴いたあと鶏が欄干に上って鳴くのを聞いて大悟した。その開悟偈は、「金鴨香銷錦繡幃 笙歌叢裡醉扶歸 少年一段風流事 祇評佳人独自知」である。佳人は③結句の美人である。なお、一休宗純は鴉声を聞いて悟りを開いた。
- (18) 杜甫「李監宅」の「且食双鱼美」に拠る。しかし、双鱼は、「遠方からの手紙」という意もある。
- (19) 注(17)の開悟偈をさす。
- (20) 中本環編『酬恩庵本狂雲集』付録『解説一六六頁』

- (21) 萩原朔太郎『詩の原理』第十章
- (22) 『空華集』巻六「席上賦五言詩、各分小杜（杜牧）千里鶯啼綠映紅句、為韻得千字」や『蕉堅稿』『読杜牧集』がある。
- (23) 筆者はこれまで『狂雲集』解釈に『碧巖録』を多く引用してきた。一休と『碧巖録』については、拙論「一休さんの詩（十五）」『大法輪』平成二年十一号所収）を参看されたい。
- (24) 講談社『日本の禅語録十二』七一頁
- (25) 『大漢和辞典』は菰苴の類語の菰苴（美しくないさま）の用例として、黄庭堅「五祖演禅师真赞」誰言貌菰苴、具相三十二をあげている。圓悟克勤の師の五祖法演の形容語としているのが興味深い。参考の為に法系を示すと、<sup>20</sup>五祖法演——<sup>21</sup>圓悟克勤……<sup>25</sup>松源崇岳——<sup>27</sup>虚堂智愚——<sup>29</sup>宗峰妙超（大灯国師）……<sup>33</sup>一休宗純（数字は积尊よりの世代）
- (26) 『狂雲集全釈上』三四九頁。
- (27) 病んで茂陵に住んだ司馬相如をさす。「楚台暮雲、茂陵吟 五十年來相如渴」△偶作△、「師笑茂陵空薄情」△岐岳和尚云々△のよう  
に艶情の意を含む。
- (28) 「羨看一錫一閑僧」△画△の如く、一休の抱く理想像。
- (29) ③⑪⑫の灯と同じく、大灯禅をいう。